

の有意義な実践が可能となった。こうした今日の状況下でこそ（井上氏が紹介された Mindfulness Based Stress Reduction をもじって『マインドフルネス』）Meditation Based Study of Religion の有効性を新たに提起しうるのであり、本パネル提題者たちの態度は宗教と宗教学の区別を曖昧にして研究の学問性を危うくする退行ではない。ただしこの試みが新たな地平を開くためには、そうした研究にふさわしい学問的言語（宗教的達人の言説とも堅実な実証主義のそれとも異なる、相互批判に耐えうる公共性をもった言語）創出、研究作法（近代アカデミズムに許容され、あるいは接続できる）確立が大きな課題となるだろう。

【全体討議】①気功は重要な身体的実践。言語と身体的実践にからむ重要な実践として、フォーカシングと、レイコフとジョンソンの理論がある。②認知療法の伝統とマインドフルネスとの比較で、瞑想を活かした心理療法にて安全担保の方法は？伝統的仏教瞑想における戒・定・慧や師弟関係という器によって意識変容や神秘体験に対する十分な強さを持った観察自我の育成が担保され、転移・逆転移を上手に使いこなしてアンビバレンスの受容とナルシズムの超克が促進されてきたことに学ぶ必要がある。③イスラームの庶民にとっては、シャリーア体系よりもファトワによる断片的具体的解釈が重要。またスーフィズムは知的と同時に庶民的な伝統もあることを葛西報告に指摘したい。④瞑想による研究が集団力学により暴走したとき、研究の質や安全性の担保は？ 歴史的方法や文献学的方法などの既存の方法を否定せず、それらを前提として瞑想的方法を加えると提案したとおり。

近代国家におけるサンガ・僧侶

代表者・司会 林 淳
コメンテータ 蓑輪顕量

なぜインド仏教は消滅したか

立川 武蔵

一 インド仏教史概観

紀元前五、四〇〇年～紀元一二〇〇年頃の千数百年間のインド仏教史は三つに分けられる。仏教誕生から一世紀頃までのインド初期仏教、その後、六〇〇年頃までの中期仏教、そして六〇〇年頃～一二〇〇年頃までの後期仏教である。インド仏教の中期および後期は、大乘仏教が勢力を有した時代であるが、後期仏教の時代では大乘仏教の一部として密教（タントリズム）がかなりの位置を占めた。密教は三時期に分けられる。四、五世紀から六〇〇年頃までの初期密教、六〇〇年から一〇〇〇年余りの中期密教、その後一二〇〇～一三〇〇年頃までが後期密教である。七、八世紀に仏教はネパール、チベットに導入された。

二 ブッダの問題―個体の死の問題―

パンジャブ地方に侵入したインド・アーリア人たちは約千年をかけてインド平原を開拓したが、インド東部に至った頃、彼らの生産様式や思考に変化が起きていた。特に都市生活者の中には「死ななくてはならない運命にどのように対処すべきか」

というような問題が生まれてきた。このような状況の中で仏教が誕生した。個体の精神的至福あるいは救済は、それ以前のウパニシャッドにも認められるが、その後の仏教がインド思想史において提示した宗教的財であった。ヤスパースは、ブッダ、ソクラテス、孔子、イエスが生きた時代を枢軸の時代と名づけたが、この枢軸の時代をそれ以前の時代と区別するものは個体の精神的至福であった。この宗教的財を仏教は紀元前後まではいわば専有していた。

三 ヒンドゥー教の台頭

紀元後には状況が異なってきた。仏教の誕生以前にヴェーダの宗教は勢力を弱めていたが、仏教や地域の文化を吸収して新しく台頭してきたヒンドゥー教もまた個体の精神的至福に焦点を当て始めたからだ。ヒンドゥー哲学の一派ヴァイシエーシカ学派の『ヴァイシエーシカ経』(一・一)(二世紀頃の編纂)は、ダルマに基づいて現世利益(アビウダヤ)と精神的至福(ニヒシュレーヤサ)があると述べる。個体の精神的至福を追求するヨーガの行法は、初期仏教において重視されていたが、ヒンドゥー教でも注目されるようになった。『ヨーガ経』の編纂は二、四世紀と考えられる。ウパニシャッドを新しく解釈しなおしたヴェーダーンタ学派のシャンカラ(八〇〇年頃)も『バガヴァッド・ギーター』注の序でアビウダヤとニヒシュレーヤサの二種の基本的財として述べている。

四 インド仏教の消滅

このようにヒンドゥー教が精神的至福を基本的な財として提示するようになると、仏教は社会に提示する財を失っていつ

た。ヒンドゥー教は人生儀礼や現世利益を求める供養(プージャヤー)を積極的に執行していたが、仏教はそうした儀礼には冷淡であった。密教は儀礼を積極的に取り入れたが、仏教全体の勢力を回復させることはできなかった。僧院中心主義を採っていた仏教は、イスラームにより仏教僧院が襲撃されると、急速に衰退した。一方、ヒンドゥー教の知識や儀礼はそれぞれの家で伝授されていた。また、イスラームはヒンドゥー教を強制的に改宗させることはしなかった。俗なる世界のなかで明確な財を示すことができなくなったインド仏教は、インド亜大陸より消滅した。北インドがイスラームの政治的支配を受けるようになると、ベトナム、カンボジアなどの東南アジア諸地域において流布していたヒンドゥー教および大乘仏教も急速に衰えた。その後、これらの地域におそらく一四、五世紀になってテラヴァーダ仏教が流布し、今日に至っている。

ミャンマーにおける国家・サンガ関係

藏 本 龍 介

問題設定

上座仏教徒社会の「近代」を考える上では、植民地化のインパクトを検討することが不可欠である。ミャンマーのサンガ(出家者集団)にとって、植民地化のインパクトとは、何よりも経済的な問題として現れた。そこで本発表では、①植民地化によって国家・サンガ関係はどのように変化したのか、②そう